Japanese association of educational psychology

定時制高校生徒の学校生活適応感および学校環境認知

—不登校に着目した縦断的研究—

金子　恵美子
（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）

【問題と目的】

「学校ぎらい」を理由に年間 30 日以上の欠席をした不登校児童・生徒は、99 年度には 13 万人を越え、義務教育終了後の不登校対策が問題となっている。そうしたなか、小中学校時代に不登校であった生徒の進路として注目されているのが定時制高校である。

本研究では、定時制高校のもとで、登校を継続している生徒と継続していない生徒の学校適応感、学校環境認知の相違を検討し、定時制高校のどのような要因が生徒の登校を支えており、さらにどのような点を改善していくことが不登校生徒の登校を支える対策として有効であるかを検討する。

【方法】

調査対象：東京都内 3 校、大阪府内 2 校の定時制高校生徒。第 1 回－175 名、第 2 回－163 名。分析対象－160 名(縦断ﾃﾞｰﾀ 101 名)。

調査時期：第 1 回－6～7 月、第 2 回－10～11 月。

調査方法：質問紙調査による縦断的研究。

調査内容：①学校享受感尺度；小林・仲田(1997)の 10 項目、②学校生活適応感尺度；内藤・浅川・高瀬・古川・小泉(1986)より「学習意欲」「友人関係」「進路意識」「教師との関係」「特別活動への態度」の計 30 項目、③出席・遅刻状況、④中学出席状況、⑤学校の雰囲気；Trickett & Moos(1995：伊藤・松井(1996)訳)、高田(1999)を参考に 15 項目、⑥フェイスシート。

【結果と考察】

因子分析(主因子法、ﾊﾞﾘﾏｯｸｽ回転)の結果、学校生活適応感は 5 因子(「特別活動への態度」「友人関係」「教師との関係」「進路意識」「学習意欲」)が得られ、学校享受感は一因子性が確認された。

(1)登校継続群・登校非継続群の分類

2 回の調査への回答状況及び第 2 回時の出席状況をもとに、登校を継続している「登校継続群」と第 2 回時に不登校(傾向)となった「登校非継続群」に分類した。その結果、登校継続群は 97 名(71.3%)、登校非継続群は 39 名(28.7%)であった。

登校継続群・非継続群において、中学での出席状況について χ^2 検定を行った結果、差の傾向が見られ（$\chi^2(1)=3.70$, $p<.10$）、登校非継続群の方が不登校だった生徒が多いことが示された(表 1)。

表1　登校継続群・非継続群の中学登校状況　人(%)

	登校継続群(N=97)	登校非継続群(N=39)
中学登校	52(55.3)	14(36.8)
中学不登校	42(44.7)	24(63.2)

(2)登校継続群・登校非継続群の比較

以上の分類をふまえ、第 1、2 回時の学校享受感、学校生活適応感について、2 群間の差を検討した。その結果、第 1 回時の「学習意欲」、第 2 回時の学校享受感、「特別活動」で登校継続群の方が得点が高く($t=1.87, p<.10$；$t=2.30, p<.05$；$t=1.67, p<.10$)、「進路意識」では登校非継続群の方が高かった($t=1.75, p<.10$)。学校享受感、学習意欲の高さ、特別活動での充実感が生徒の登校継続と関連していることが推測され、学習意欲や特別活動での充実感を高めるよう働きかけることが生徒の登校を支える上で重要であることが示唆された。

次に、学校の雰囲気について、2 群間の差を検討した結果、「生徒は互いに仲がよい」「学校活動に一生懸命」「一人ひとりの意見が大切にされる」の 3 項目で登校継続群の方が得点が高いという結果だった（$t=2.55$、$p<.05$；$t=1.76$、$p<.10$；$t=1.71$、$p<.10$）。生徒間の仲が良く、学校の活動が活発であり、一人ひとりの意見が大切にされる学校の雰囲気を作ることが生徒の登校を支える上で重要であることが示唆された。

NII-Electronic Library Service